新書紹介

地域福祉の思想と実践

阿部志郎編

海声社　A4判　二九二頁　二、〇〇〇円

今日、福祉について考える時地域福祉を抜きにしては福祉を考えることはできない。しかしながら、児童福祉、障害福祉、老人福祉といった概念と地域福祉とを比較してみると、いまひとつわかりにくい概念であることは否めない。そのため、地域福祉とは何か、今、なぜ地域福祉なのか、といった問いに対して的確に答えることはなかなかむずかしい。

地域福祉という考え方は、ここ二十年間位の間に定着してきた考え方であるが、施設から在宅へといった現在の福祉の動向の中で、地域福祉と在宅福祉サービスとが混同されていたり、福祉予算における国庫補助率の引き下げ等いわゆる臨調行革路線の進む中で、地域福祉論は、福祉行政の後退に組みするものであるといった批判さえある。

地域福祉の概念はいまだこのような状態にあるのだが、本書では、そのタイトルのとおり、「地域福祉の思想と実践」について様々な角度からの検討を行っている。ただし、本書が、編著者の阿部志郎氏が館長を務める横須賀キリスト教社会館の設立四十周年の記念の意味を込めて出版されたものであるため、地域福祉論に主軸を置きながらも、その実践的方法論であるコミュニティ・ケアの検討に重点が置かれている。

執筆は、阿部館長をはじめとする社会館の「コミュニティ・ケア研究会」のメンバー及び社会館の役員であるコミュニティ・ワーカー、研究者、行政職等の十名の人々があたっている。

全体構成は、なぜ今日の社会福祉が地域社会を問うのか、そして社会館のこれまでの実践、とりわけ田浦地区での実践を軸に地域福祉の系譜をたどると共に、地域福祉の今後の方向を探るという形になっている。すなわち、思想編、実践編、課題編に分けて地域福祉論を展開しているのだが、必ずしもその区分は明確ではなく、内容的にはかなり重複している部分がある。

Ⅰの地域福祉の思想では、コミュニティ概念を社会学の観点から検討すると共に、福祉部門からのコミュニティへの接近として、セツルメントからコミュニティ・ケアへの変遷を、社会館の歩みに重ね合わせてたどっている。そして、コミュニティ形成の意義を強調しながら、「公私協働」「機能分担」「住民参加」を、地域を基盤にして、どのように図るか、という問題提起を行っている。

当然のことながら、Ⅱの地域福祉の実践には最も多くの紙数が費やされている。Ⅰでの問題提起を受けて、1地域社会のニードとネットワークでは、ホームヘルプサービスを例に上げてニードのは握の問題を、2地域におけるサービスの統合と展開では、在宅老人とその家族の問題に焦点をあててコミュニティ・ケアのあり方を、3在宅福祉サービスの供給組織では、福祉供給システムにおける公私関係の問題を、4地域福祉と自治体行政では標題の示すとおり、地域福祉展開のための自治体の課題について、それぞれ検討を加えている。これらの内容は、阿部氏が概念規定するところの、**コミュニティ・ケア**「一定の地域で、住民がその相互の福祉を守るための自発的活動と自らの組織化運動を通して、福祉問題に対する公私の責任分野の明確化と各種機関・施設の体系化をめざす社会福祉の方法である」**地域福祉**「地域内の公私の機関が協同し、各種社会福祉のための施策・施設等の資源を動員することによって、地域の福祉ニーズを充足するとともに、住民参加による社会福祉活動を組織し、地域の福祉を実現してゆく具体的努力の体系をいう」に対応している。

Ⅲの地域福祉の課題は、むしろ、社会館の課題ともいうべき章である。その時代時代の社会福祉の状況に対応しながら、ニードを掘り起こし、実験的に充足し、更にニードをより適切な資源へと結びつけていった社会館の実践の四十年の総括は、自負と自信にあふれている。また社会館がかかわっている国際社会福祉協議会の「アジア・ソーシャル・ワーカー日本研修プログラム」についての報告では、ともすると限られた視野しか持てない福祉の分野に、国際性という新しい問題提起を行っている。「福祉に関する地球規模の活動の拠点としての活動を一層拡大していくことをもう一つの課題としたい。足はしっかりと高齢化がすすむ田浦の地におろしつつ、広く世界を望みながら、国際交流を深め今後の仕事を続けていきたいものである。」という、いわば決意表明は感動的でさえある。

△民生局地域福祉課・宮永啓子▽